沖縄島産ヒメジャノメの幼虫と蛹

高 橋 真 弓

静岡市北安東五丁目13番11号

On the larva and pupa of *Mycalesis gotama madjicosa* Butler (Lepidoptera: Satyridae) from Okinawa Island, the Ryukyus

MAYUMI TAKAHASHI

筆者（1974）はヒメジャノメ *Mycalesis gotama* Moore の八重山群島（石垣島）産の亜種 *madjicosa* Butler と日本本土一屋久島の亜種 *fulginia* Fruhstorfer の幼虫のあいだにかなり大きな相違のみられることを報告したが，亜種 *madjicosa* のなかでも，奄美大島一沖縄島のものと八重山群島のものとは，成虫の斑紋や色彩が明らかに異なっており，さらに幼生期の比較が今後の問題として残されていた．

1973年11月2日，長嶺邦雄氏から沖縄島那覇市末吉産のヒメジャノメ20卵をお送りいただいたので，これらを飼育して幼虫・蛹の形態，色彩，および幼虫のスズメノカタビラ *Poa annua* Linnaeus（イネ科）に対する嗜好性などを比較したところ,* 日本本土一屋久島のものだけではなく，八重山群島のもとのあいだにもかなりの相違点を見いだすことができたのでここに報告する．なお，飼育した個体数はかならずしも十分とはいえないので，さらに多くの材料を用いて検討が進められることを期待する．有益な示唆を与えられた白水隆博士，貴重な材料を提供された長嶺邦雄氏，および材料の一部を飼育され，そのデータを提供された田中蕃氏にあつくお礼を申しあげる．

1. 飼育の方法および結果

孵化した幼虫は，直径 10 cm, 高さ 5 cm のプラスチック容器（蓋以外の部分は透明）を用い，アシボソ *Microstegium vimineum* A. Camus を与えて飼育したが，この植物が枯れはじめたので，2齢期以後，直径 10 cm, 高さ 14.5 cm の金網付透明ガラス飼育ビンにスズメノカタビラを植え，幼虫をこれにとまらせた．幼虫の個体数は1個の飼育ビンにつき10頭ずつとし，2個の飼育ビンを用いて飼育したが，ことに終齢期には個体密度が高すぎて，3頭の個体は前蛹期に他の幼虫の吐いた糸にからめられ，完全に脱皮できずに死亡した．なお，飼育ビンは明るい室内（暖房なし）に置いた．

20個の卵は11月3一4日に孵化し，幼虫は順調に発育して12月1日には発育の進んだものは3齢となった．翌年（1974年）の1月に入るとこれらはすべて終齢となり，越冬中も摂食を続け，スズメノカタビラをかなりよく食して発育した．4月4日から蛹化がはじまり，3頭は前述のように脱皮に失敗して死亡したが，他の個体は4月22日から5月22日にかけて羽化した．筆者の飼育したものは13頭（5♂♂8♀♀）がほぼ完全な状態で羽化したが，2頭は翅が十分に伸びきらず不完全な個体であった．残りの終齢幼虫2頭は田中蕃氏がススキを用いて飼育されたが，完全な1♀が羽化し，他の1頭は不完全に蛹化したまま死亡したとのことであった．羽化した個体はいずれも春型で，ほぼ完全に羽化した5♂♂9♀♀の前翅長の平均は，♂22.0 mm（最小 21.3 mm, 最大 22.6 mm), ♀25.1 mm（最小 24.2 mm, 最大 26.3 mm）であった．

*この植物は日本本土一屋久島においても野外で本種の食草として確認された記録がないが，この植物を幼虫に与えることにより，その潜在的な食性をある程度ひきだすことができるものと思われる．

2. 幼虫・蛹の特徴

飼育した材料に関する限り，沖縄島産のヒメジャノメの幼虫・蛹の特徴をまとめるとつぎのようになる.

1） 1～2齢幼虫はいずれも緑色型で，2齢幼虫は八重山群島のものと同様，亜背部や体側を走る白色の条線がかなり明瞭である.

2） 3齢幼虫はすべて褐色型となり，各腹節の左右の亜背部に対をなす暗色斑が現れる．これらの特徴は終齢期まで引き続いてみられる．3齢幼虫の頭部の色彩は日本本土一屋久島のものに似て，暗褐色と淡褐色の斑模様がみられるが，全般にいくぶん灰色を帯びている.

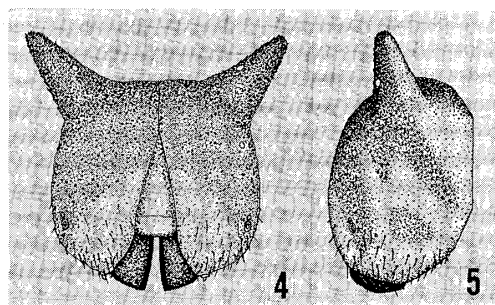
3） 終齢幼虫が引き続いていずれも褐色型となる点は，そのほとんどが緑色型となる日本本土一屋久島のものとは異なり，八重山群島のものと共通している.

4） 終齢幼虫の頭部の1対の突起は，日本本土一屋久島のものよりもやや長いが，八重山群島のものよりは明らかに短い.

5） 終齢幼虫の頭部の前面は，その大部分が暗灰褐色となるが，下部が三角形状に淡色となる（figs. 3, 4）．ただし，頭部の側面には暗色と明色の斑模様が現われ，日本本土一屋久島のものといくらか似ている（figs. 2, 5）.

6） すくなくとも2齢以後はスズメノカタビラをよく食し，この植物により多くの完全な個体が羽化するという点では日本本土のものと共通しており，八重山群島のものとは明らかに異なっている.

7） 蛹は大部分が緑色型で，17頭中15頭が緑色型，他の2頭は褐色型であった．蛹化場所は大部分が飼育ビンの金網やその側壁（透明ガラス）で，一部は食草上であったが，全体的にみて，蛹の色彩と蛹化場所の関係はみられなかった．この傾向は，蛹化場所のいかんにかかわらず，褐色型の幼虫から緑色型の蛹を生ずる八重山群島のものと類似しているように思われる．蛹の形態は，幼虫の場合とは異なり，顕著な地理的変異を示さないが，沖縄島のものにもきわだった特徴を見いだすことができなかった.

Figs. 1—3. Final instar larva of *Mycalesis gotama madjicosa* Butler from Okinawa Island, the Ryukyus.

Figs. 4—5. Final instar larva head of *Mycalesis gotama madjicosa* Butler from Okinawa Island, the Ryukyus: (4) frontal view, (5) lateral view.

3. 考 察

以上に述べたことから，沖縄島産のヒメジャノメ *M. g. madjicosa* Butler の幼虫は，飼育した材料に関する限り，①胴部の色彩は八重山群島産の特徴を，②スズメノカタビラに対する嗜好性については日本本土一屋久島産の特徴をもち，また，③頭部の突起の長さは両者の中間的な特徴を示すが，④3齢期以後の幼虫にみられる亜背部に対をなす暗色斑の列，終齢幼虫の頭部前面の色彩などは，いずれにもみられない独自のものであるということに要約できるのではないかと思われる．以上の特徴から総合的に判断すれば，筆者の飼育した沖縄島産のヒメジャノメの幼虫は，日本本土一屋久島のものとも，八重山群島のものとも明らかに識別できるものである．もし上記の特徴が沖縄島産のヒメジャノメの幼虫に普遍的にみられるものとすれば，亜種 *madjicosa* のなかでも沖縄島のものと八重山群島のものとのあいだにみられる成虫の斑紋の相違が，幼虫の特徴からも裏づけられることになり，けっきょく，

日本産ヒメジャノメを日本本土一屋久島，奄美大島一沖縄島，八重山群島の3亜種とすることが必要になると思われる．奄美群島のヒメジャノメの幼生期の特徴については，これまでに発表されたものがないが，おそらく沖縄島のものと近似のものであろう．なお，上記の亜種の扱いについては，以前に白水博士からもそれと同様のご意見をうかがっていることを付記しておく．

参考文献

藤岡知夫 (1972) 図説日本の蝶．ニュー・サイエンス社，東京．

福田晴夫ほか (1972) 原色日本昆虫生態図鑑Ⅲ (チョウ篇)．保育社，大阪．

白水　隆 (1965) 原色図鑑日本の蝶．北隆館，東京．

白水　隆・原　　章 (1960) 原色日本蝶類幼虫大図鑑Ⅰ．保育社，大阪．

高橋　昭 (1952) ヒメジャノメの幼虫及び蛹について．ニュー・エントモロジスト 1 (3/4)：24〜26.

高橋真弓 (1974) 石垣島産ヒメジャノメの幼虫と蛹．蝶と蛾．25：131-135.

Summary

The larva and pupa (including the food plant) of *Mycalesis gotama madjicosa* Butler from Okinawa Island, the Ryukyus, are compared with those of *M. g. fulginia* Fruhstorfer from the mainland of Japan and Yaku Island and *M. g. madjicosa* Butler from Ishigaki Island, the Ryukyus.

Conspicuous differences are found in shape and colouration of the larval head, colouration of the larval body or the food plant (in rearing), not only between the two subspecies, *fulginia* and *madjicosa*, but also between the two races of the latter, from Okinawa and Ishigaki Island, the Ryukyus.